

田以外の中央や他の地方の代表的な民俗学者から多数の寄稿を載せているところである⁽⁹³⁾。この雑誌においても一九三九年前後、中国に関する内容が数多く現れてくる傾向が確認できる(表7)。

柳田国男を中心とする全国規模の民俗学会の機関誌『民間伝承』、民俗学発展の重要な一翼を担う中央の民俗誌

表7 『ひだびと』外地関係記事一覧

号数	刊行年月	執筆者	表 題	備考
6-12	1938 年 12 月	杉本寿	「中北支那に於ける農業性 —農政経済的」	巻頭
7-3	1939 年 3 月	杉本寿	「中北支那に於ける農業性」	巻頭 巻頭
7-3	3 月	三浦薫雄	「揚子江」	
7-9	9 月	杉本寿	「中支だより」	
7-12	12 月	三浦薫雄	「支那人と月」	
8-4	1940 年 4 月	杉本寿	「安徽省山境」	
8-5	5 月	八幡一郎	「南洋だより」	
8-8	8 月	大間知篤三	「満洲の端午節」	
10-9	1942 年 9 月	沢田瑞穂	「神巫記」	
11-6	1943 年 6 月	長岡博男	「北満の民俗 (一)」	
11-7	7 月	長岡博男	「北満の民俗 (二)」	
11-10	10 月	直江広治	「北京東郊民俗聞書」	巻頭
12-5	1944 年 5 月	周作人	「ツブラと茅茸家」	巻頭 (訳文)

出典：『ひだびと』各号より作成。

3 一九三九年——一つの変り目

1 日本民俗学の一九三九年

興味深いのは、地方民俗誌『ひだびと』である。この雑誌の前身は『飛騨考古学会会報』(一九三三年四月～一九三四年一月、一、二、二一―号)であり、のち一旦『石冠』(一九三四年五月～十月、二一―、三、四号)と改名したが、一九三五年一月から飛騨考古土俗学会(岐阜県高山町)の機関誌として再出発し、一九四四年五月まで毎月刊行されていた。主な執筆者は江馬三枝子、江馬修、山田白馬、福田夕咲など飛騨考古土俗学会のメンバーであり、柳田は巻頭論文「団子浄土」(五一―、一九三七年三月)を始め、「飛騨と郷土研究」(五一―八)、「耳たぶの穴」(六一―八)、「女と煙草」(七一―二)、「文化と民俗学」(一〇―十)などを寄稿している。この雑誌の特徴の一つは、地方民俗誌として珍しく柳

『旅と伝説』、地域を越えた広い視野を持つ地方民俗誌『たびびと』などでは、ともに一九三九年頃を境に中国関係の内容が多くなり、日本民俗学と中国との関わり方においてここに明らかに一つの変わり目があった。

一九三九年、柳田個人の中国への関心の一斑は、同年二月『科学知識』一九一二（科学知識普及会）のアンケート「最近読んだ書」への返答として、六冊をあげた中で二冊が中国関係のもの（内藤湖南『支那絵画史』、梅原末治『支那考古学論攷』）であったこと⁹⁴からも窺える。当時、中国を主な対象とした『アジア問題講座』（全十二巻、一九三九年一月～一九四〇年四月）が創元社から刊行されており、柳田はその編集顧問の一人でもあった⁹⁵。

2 占領と中国調査の展開

日本の民俗学と中国との関わりに関して一九三九年が一つの変わり目であったことは、戦局の変化、そして戦争を支える諸体制面での動きとも一致している。

一九三八年末の武漢作戦以降、日本は中国の華北、華中、華南地域において鉄道や河川など交通沿線にある重要都市を押さえたものの、その奥地及び西北や西南の広範な地域が支配外にあった。即決戦と予定していた中国との戦争は長期戦に入った。

日本の中国研究は長い歴史を持っているが、しかし歴史、制度、文章、典籍に関するものが多く、中国に渡った人々の紀行文や日記などはあっても、現代中国への関心による実地調査は、近代国家の形成をめざす明治以降のことであった。早くも一八七五年に勸業寮により清朝の物産についての調査が行われ、その後大陸政策のもとで、政府や民間諸機関による各種調査が行われるようになった。しかし中国との戦争が長期戦に入ってから、上の政府や軍部から下の研究者まで、中国を知っているつもりでいて実はよくわからないと改めて思い知らされ、実地調査による現実の中国を理解、把握することが急務となった。

中央において占領地の事務を一元的に管理する部門、現地において外務省駐在機関以上の職能を持つ出先機関と

して一九三八年十二月に興亜院が、そして翌年中国各所に連絡部、事務所が設置された⁹⁶。その後興亜院は早速中国関係の調査活動の整理、統合に取りかかった。

一九三九年四月に興亜院華中連絡部（事務所は上海）が設置されると、「事変処理機関として中支の新政権保育、文化、経済等の各建設に邁進することとなったが、其の第一着手として官民各調査機関を統合して『中支調査聯合会』を創設⁹⁷」し、「中支那にある官民主要調査機関の相互協力の下に、我国の中支那に対する政治、経済、文化諸方策の確立に必要な現地調査を行ふこととなつた⁹⁸」。

同時に張家口においては、一九三九年、蒙古自治聯合政府、興亜院蒙疆連絡部、滿鉄張家口經濟調査所、北支那開發会社、蒙疆銀行、華北交通会社張家口鉄路局、蒙古善隣協會などの活動を、軍を中核に統合する動きが現れ、その結果一九四〇年一月「蒙疆調査機関聯合会」の設立を見た⁹⁹。ほぼ時期を同じくして、興亜院華北連絡部（事務所は北京）のもとで「華北聯合調査委員会」、青島において「青島調査機関聯合会」も設置された¹⁰⁰。

日本においても在京の中国調査機関の連携のため、興亜院の提唱で一九四〇年十月「支那調査関係機関聯合会」が発足した¹⁰¹。興亜院、北支那開發会社、台湾銀行、台湾拓殖会社、台湾南方協会、東亜海運、東亜研究所、中支那振興会社、日本興業銀行、日本銀行、日本商工会議所、三菱經濟研究所、滿鉄、横浜正金銀行などが結集し、十二月に東洋拓殖会社、朝鮮銀行も入会した¹⁰²。

同時に一九三九年には東亜研究所¹⁰³第六調査委員会によって華中商事慣行調査や華北農村慣行調査（以下「慣行調査」と記す）などの計画が立てられ、慣行調査に関して東京で末弘厳太郎など東京帝国大学の関係者を中心する研究チームが作られた。一方、滿鉄調査部北支經濟調査所第三班（一九四一年に慣行班と改称）も一九三九年から十年計画で華北土地慣行調査の準備作業を展開していた。一九四〇年に杉之原舜一をリーダーとする陣営をもって、最初の三年間は東亜研究所に資料提供することとなり、東京の帝大での學術研究、華北での滿鉄の資料収集というシステムが確立された¹⁰⁴。

また、外務省は一九三五年以降対支文化事業の一環として支援してきた永尾龍造¹⁰⁵の中国民俗研究の業績出版もサポートすることを決め、一九三九年に文化事業部内に支那民俗誌刊行会を設立し、印刷と販売に関して大日本印刷、丸善会社との交渉を終え、各巻六〇〇頁と索引一卷の『支那民俗誌』全十三巻の刊行事業を始めた¹⁰⁶。

3 日本民俗学徒と中国

戦争が始まってから多くの民間伝承の会の会員が中国と関わっていったが、日本の民俗学徒は前述のような上からの組織的な動きに直接関わることはなかった。中国との関わりはまず個人の中国民俗に対する興味関心として現れ、それはまた民間伝承の会への要望にも現れて来た。研究の必要に関する最初の提言は『民間伝承』四一三（一九三八年十二月）大阪の大橋富枝による会員日より「支那の民俗を」であった。

去る八月上旬から約一ヶ月に互り新京から北京の方へ旅行いたしましたが支那の民間伝承は我国のそれに比して可なり奇怪なものが多く様に聞きました、私は研究の時間が少なくて残念ですがどなたがこれに就いて誌上に発表して戴ければ大幸です。

あたかもその要望に応えるかのように、一九三九年一月、『旅と伝説』に太田陸郎による中国民俗に関する文章が掲載され、その後、『旅と伝説』『民間伝承』などに中国民俗関係の会員通信や投稿が多く見られた。このような要望や実際の行動と比べ、柳田や木曜会など上層部の意見はまだ保守的だと言わざるを得ない。

『民間伝承』四一六（一九三九年三月）は倉田一郎による巻頭言「時局下の民俗学」を載せている。倉田はこのように述べ始めた。

昨日まで民俗学の将来を愉しさに語らつた青年が、今日は心機動揺の口調を以て、この激動期の時局下に悠長に民俗を研究してをられない、若人の関心は大陸に在るといふ。

「激動期の時局」とはもちろん中国との戦争を指している。戦争の状況に関心を持つ若者にとつては、民俗研究が時局にそぐわない「悠長」なものに見えた。担い手として期待されている対象であるからこそ、民俗学にとつて事は重大である。

そういう「心機動揺」に対する倉田の答えは明快である。民俗学の貢献は決して「千人針」のような個々の民俗事象の詮索にはなく、民俗学は「日本民族生活の凡ての方面の根本的な研究」をめざす「国学」であり、そして「直ちに応用」できるものでもある。それは「東亜再建の大業」の一環である「事変処理」にも、「爾後の植民政策」にも大きく寄与する。即ち悠長どころか、民俗学こそ学芸の時局貢献の最適な道である、と倉田は説いている。

従来、「民俗学がいわば実学として国民生活や植民地支配に役立つべきことが熱烈に説かれている」⁽¹⁰⁷⁾、或いは「植民地政策の重要な指針を提供し得る学問としての民俗学的重要性」を主張したものとされている⁽¹⁰⁸⁾この文章は、確かに民俗学の時局寄与の可能性を最初に説いたものである。しかし同時にまた民俗学が無用だと思ふ人の目を民俗学に向けさせるための文章であった。日本についての根本的な研究という目的、社会や時代への寄与という実用性を説く論理は、柳田が好事的態度を批判し、民俗学の意味を強調する際と共通している。

大陸への寄与を述べるときでも、「彼此両国の民俗学に依る両民族の生活の究明比較に俟つ」と、「一国民俗学」の理解から外れておらず、実践的な問題については踏み込んでいない。「一国民俗学」が「実」、「世界民俗学」が「虚」であるのと同じく、ここでは国民生活への寄与は「実」であり、植民地政策への寄与は「虚」であると理解されるべきであろう。

一九三九年三月、柳田国男が『アジア問題講座一 政治・軍事篇（一）』に寄せた序言「アジアに寄する言葉」についても同じである。柳田はこう結んでいる。

支那は驚くほど豊富な昔話の貯蔵地であるが、往来久しく親しいものがあつたにもかかわらず、われわれは西洋人に先鞭をつけさせて傍観して来た。しかもあの四角い字だけは、はるかに容易に読み得たのである。独り支那とは言はず、常民の心の最も奥にひそむものを、これによつて突合せて見るといふことは、五族協和の理想のためにも、必要な仕事であつた筈だ。東亜の新しい秩序の礎石も、案外かやうな処にあつたかも知れないのである⁽¹⁰⁹⁾。

一九七五年藤井隆至の「柳田国男のアジア意識」⁽¹¹⁰⁾以来、よく引かれる箇所であるが、ほとんどの場合、柳田のこの発言を一九四〇年『朝鮮民俗』への寄稿「学問と民族結合」及びその草稿「比較民俗学の問題」と合わせて柳田の比較民俗学への期待と昂揚感として理解されている⁽¹¹¹⁾。しかし果たしてそういういされるのか。

4 柳田国男の昔話比較発言

この『アジア問題講座』の序言は、同年一月に丸善の情報誌『学鐙』の依頼を受けて兎年に因んで執筆した「続かちかち山」⁽¹¹²⁾を基礎に加筆修正したものであつた。前作の「一昨年英訳せられて出たW.Eberhardの支那民話集」という具体的内容を「西洋人に先鞭をつけさせて傍観して来た」という表現に変えている。

一九四〇年『朝鮮民俗』への寄稿とその草稿と合わせてみると、何れも話題を昔話に限定しており、表現は異なるが何れも「W.Eberhardの支那民話集」が登場していることがわかる。

此頃芬蘭のF・F・Cから出した、エーベルハルトの支那の民間説話の分類を見ても、よく似た話は亦中国に幾らもあります〔学問と民族結合〕⁽¹³⁾。

最近に芬蘭のF・F・Cから、独逸の或学者の研究した支那の民間説話の総索引のやうなものが刊行せられた〔比較民俗学の問題〕⁽¹⁴⁾。

その外、一九三九年三月の「猿と蟹」にも「一昨年五月に英訳せられた独逸人エーベルハルトの支那民話集を読んで見ると（後略）」⁽¹⁵⁾とある。柳田の一九三九、四〇年の昔話比較に関する発言は時局によるものというより、昔話研究の新しい成果に刺激されてのものというべきであろう。

一九三二年に杭州で結成された中国民俗学会は積極的に海外との提携を進め、日本では折口が主宰した『民俗学』と交流があったが、同じ時期にドイツ人エーベルハルト(W. Eberhard)は中国の学者と密接に連絡して中国の昔話神話研究を進めていた⁽¹⁶⁾。彼は日中戦争が勃発した年に、名著『中国昔話の型』*Typen chinesischer Volksmärchen, Folklore Fellows Communications 120* (Helsinki, 1937) を世に出した。

柳田はFolklore Fellows Communications (FFC) の出版物を数多く所持していたが⁽¹⁷⁾、一九三六年以降戦後までの号はなかった。この著作について柳田はしばらく把握できなかったと思われる。日本民俗学において初めての本にふれたのは管見の限り、『民間伝承』三一―一一（一九三八年七月） 関敬吾による李献璋『台湾民間文学集』の紹介であった。

最近独逸の学者の手になつた支那の昔話のタイプを見ると吾が国のそれとの実に驚くべき多数の類似せるものを発見する。台湾の伝承にも多くのかうした類似を見出すのであらう。吾が国の伝承を明確にするためには近

隣の資料との比較の必要のあることは云ふまでもない。

関敬吾が昔話研究を本格的に始めた理由には鍾敬文の中国民譚のタイプ研究からの刺激があった⁽¹¹⁸⁾。そして昔話の世界的な共通性は当時すでに常識であり、「近隣の資料との比較」は関の一貫した主張であった。とくに関にはドイツ語の能力が高く、一九三五年すでに『民族学研究』と *Das Stiefmuttermotto im Märcchen der germanischen Völker* (ゲルマン諸族のメルヒエンにおける継子モティーフ) の書評を書き、一九三六年『昔話研究』の「独逸に於ける昔話研究」以降、ドイツにおける民俗学、昔話研究の紹介を続けていた⁽¹¹⁹⁾。彼でさえこの時期初めてふれえたので、柳田がこの本の存在を知ったのはおそらくほぼ同じ時期だと思われる。柳田にとって、中国は民俗の宝庫であるが、その研究はあくまで中国人自身の努力に待つという態度をとっていた。しかしドイツ人はこの宝庫を利用して素晴らしい研究をなし遂げた⁽¹²⁰⁾。この事実は西欧の民俗学、民族学に強い対抗意識を持つ柳田国男にとっては大変な衝撃に違いない。

欧米人にできたことは我々にもできる。しかも我々には文化的交流関係や共通の漢字があり、もっと有利なはずである。ここには明らかに世界学問体制における日本の地位を日頃から気にする柳田の勝負心が見て取れる。昔話には世界的な一致が見られ、それに対してまだ説明できるような仮説がないことを、彼は誰よりもわかっているからである⁽¹²¹⁾。序言「アジアに寄する言葉」だけではなく、『アジア問題講座』への関与の背後に、学問の対象としての中国をめぐる柳田の欧米対抗意識があったとも考えられるし、この段階での昔話比較の言説は、東アジアにおける実践活動の提言ではなく、柳田一流の負けず嫌いの発露として理解されるべきであろう。

可能性ばかりほのめかし、実践的な意欲を示さなかった柳田や『民間伝承』の論調と比べると、社会的な要請や各方面の動きがもっと積極的であった。たとえば『旅と伝説』の記念すべき通巻一五〇号（一九四〇年六月）の巻頭言は「支那大陸の民俗調査の必要」であった。「支那民俗の調査といふやうなことも、日本ではまだ全然問題に

表8 一九三七年以降民間伝承の会内地会員中国経験（一部）

氏名	民間伝承の 会入会号数	入会地域	中国にいる時期	中国での活動場所	身分・活動	出典	関連著述・「民間 伝承」会員通信
石田英一郎	一一一	京都	一九四二年夏	華北、内蒙古、北京	帝国学士院東亜諸民 族調査委員会嘱託、 回族調査	『民間伝承』八一五、『石 田英一郎全集・年譜』（二 九七二）	『中国との出会い』 「人間をもとめて」 文化人類学三十年 一」（一九六七）
石田英一郎	一一一	京都	一九四四年～一九 四六年	内蒙古、北京	西北研究所次長	『石田英一郎全集・年譜』 （一九七二）	
井上昇三	不明	不明	一九三九年	北京	不明	『民間伝承』五一三	
太田陸郎	一一三	兵庫	一九三八年七月～ 一九四一年七月	中支（上海～漢口）	中支派遣軍太田部隊 隊長（少尉、のち中 尉）、水上輸送	『民間伝承』四一〇、一 二、五一、三、五、六、 八、一〇、一一、六一二、 三、四、六、七、一二、 七一、二、三、八、五	『支那習俗』（一九 四三）、通信一九通
大間知篤三	一一一	東京	一九三八年二月～ 一九四六年	満洲、北支	建国大学講師（のち 副教授、教授）	『民間伝承』四一七、八、 一二、五一、三、四、 一一、六一六、一二	『満洲民族雑記』（一 九四四）など、通 信十通
折口信夫	一一一	東京	一九四一年八月～ 九月	北京、南京、蘇州、 杭州、上海	神祇講座講師	『民間伝承』七二三	『折口信夫全集』三 四所収友人宛葉書
河本正義	一一四	兵庫	一九三七年	不明	従軍記者	『民間伝承』三一	
岸田定雄	一一一	奈良	一九三九年八月～ 一九四〇年	南支	南支派遣軍兵士	『民間伝承』五一、一、三、 五、六一三	通信四通
小島勝治	一一二	大阪	不明	中支	中支派遣軍兵士	『民間伝承』九一四、「橋 浦文書」	

小玉曉村	不明	秋田	一九四〇年五月 六月	北満、北支	秋田県囀託慰問演芸 団の引率	『民間伝承』五一〇、九 一	
小寺融吉	東京	一九二九?	満洲	旅行	兵士	『旅と伝説』三一	『満洲と朝鮮』
小林伝十	島根	一九三七～一九 三八年	不明	兵士		『民間伝承』四二	
沢田四郎作	大阪	一九四一年七月～ 一九四五年	満洲黒河省、小神府、 熊岳城	満光六〇〇四部隊軍 医(少尉、のち中尉)		『民間伝承』七一、三、 八一七、九一四、五、一 〇一、五、『沢田四郎作 博士記念文集』(一九七二)	『五倍子雑筆』二一、 一二(一九四九、 五一)、通信七通
守随一	東京	一九三八年一〇月 ～一九四四年一月	満洲	満鉄新京支社(のち 調査室業務主任)、経 済調査		『民間伝承』四一六、七、 八、九、一一、五一三	通信六通
関口泰	神奈川	一九四四年	舟山島、上海	不明		『民間伝承』一〇一五	
多田貞一	兵庫	不明	北京、河北	北京大學医学院専任 講師		『民間伝承』一〇一	『北京地名誌』(一 九四四)
橘文策	大阪	一九三九年八月～	満洲	満洲国通信社記者		『民間伝承』五一	
玉岡松一郎	兵庫	一九三七年～	不明	兵士		『民間伝承』三一、四一 六、五一	
千葉徳爾	宮崎	一九四二年～	満洲興安北省	一九四四年中尉、海 拉爾(兵要地誌作成)		『民間伝承』七一五、炭 焼日記	
直江広治	東京	一九四一年七月～ 一九四六年	北京、山西、華北山 東	北京日本中学校教師、 北京輔仁大学講師		『民間伝承』六一一、七 一三、八一五、九一五、六、 七、八、一〇一、一〇 一五	『中国の民俗学』(一 九六七)など、通 信八通

長岡博男	一四	東京	一九四一年夏	満洲	満第四六三一部隊軍医(少尉)	『民間伝承』七―三、九―一、九―二、『橋浦文書』	
野口長義	一一	東京	一九四〇年秋	北支、満洲	東亜研究所副調査員、回族調査	『日本民俗学大系二』	
早川孝太郎	二二	東京	一九四〇年一〇月 十一月	朝鮮、満洲	不明	『民間伝承』六―三	
早川孝太郎	二二	東京	一九四二年春	北京	北京大学講演	『直江書簡』	
丸山学	一二	広島	一九三七年八月 一九四一年一月	中支(上海、南京)	兵士、兵团司令部参謀部附、支那派遣軍総司令部報道部、占領地区民俗調査	『旅と伝説』一三―一、『丸山学選集・民俗学篇』(一九七六)	『野戦風情』(一九四〇)、『大陸の思想戦』(一九四二)
丸山学	一二	広島	一九四三年九月	満洲	視察旅行	『旅と伝説』一六―一	『満鮮民俗の瞥見』 『旅と伝説』前掲
和歌森太郎	六七	東京	一九三九年一二月 一九四〇年九月	河南、山西、華北、 北京、天津	北支派遣軍兼重部隊	『和歌森太郎著作集・年譜』(一九八三)	『年中行事より見たる東亜歴史圈』『史潮』一〇―三・四(一九四一)など
玉置正美	五一	東京	一九四二年	北支	不明	『民間伝承』八―五	
斉藤甚兵衛	不明	福井	一九四一年	満洲	不明	『民間伝承』七―一	
大橋富枝	一八	大阪	一九三八年八月 九月	新京、北京	旅行	『民間伝承』四―三	

出典…『民間伝承』各号、『民間伝承の会会員名簿』(一九四四年十二月)により作成。

なつてゐない。之は既往の日本の学界の態度が、為政者の対支政策を反映してゐたこと」として、「支那民俗の研究調査に早く意を注ぐことを希望してやまない」と主張する巻頭言に呼応して、中国との比較を内容とする前記藤原相之助「馬蚕神話の分布―オシラ神との関係―」を巻頭論文とし、さらに「編輯後記」で「藤原先生の馬蚕神話は、もうとつくに誰かに論じられてゐてよい筈のものであるが、比較が限定せられすぎてゐる日本民俗学が、今まで閉却してゐたところであつた」と日本民俗学の中国進出を促している。

このような状況を考えれば、柳田を中心とした意見は保守的であつたと言える。しかし柳田が朝鮮との関係で「比較民俗学」という言葉を使い、その可能性について論じたことは重要である。結論は否定的であつたが、「世界民俗学」から「比較民俗学」への言葉の転換は、太平洋戦争段階の、実践を前提とした論理の転換のために素地を準備したといえよう。論理を転換させるためには、漠然とした「時局の影響」ではなく、具体的な契機が必要であつた。

一方、中央、地方の民俗学者と中国の関わりはさらに増えていった（表8参照）。彼らの存在と活動は、そうした具体的な契機の形成に大きな役割を果たしていた。次章以下は、その中で太田陸郎、大間知篤三、直江広治を取り上げ、具体的に検討していく。この三人とともに柳田に直接指導を受け、弟子として高く期待された人物であつたが、ともに比較的長期にわたつて中国に滞在し、学問的調査や研究を続け、その活動は日本民俗学の組織や理論と行動に重要な影響を与えていた。